

中国膠東地区谷雨節と住民意識の考察

——山東省栄成市鎡鄒島の事例——

姜 婧

JIANG Jing

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 中国民俗研究において、現地の住民意識に関するものは極めて少ない。本稿では、山東省栄成市鎡鄒島地区の谷雨節に対する考察を通じ、現地の住民意識を捉えていきたい。

研究方法は文献収集とフィールドワークを中心として行う。筆者は1年間で何回も調査地に滞在し、観察者の視点で日々調査地の人々の生活を観察してきた。調査地の人々と心深くまで話ができたことを踏まえて、本稿を作成した。

栄成市には、古代から「谷雨⁽¹⁾、百魚上岸」ということわざが民間にある。当地における経験のある漁民によると、谷雨になると、黄海の海流で近海には数多い魚が現れるという意味である。谷雨節は、栄成市の漁民たちが谷雨に行うイベントである。

調査地の鎡鄒島は、栄成市東南部に位置している島である。島には伝説、世間話が数多く残っている。なかでも、形が剣のような島であるため、一番有名な伝説は「鎡鄒島は中国神話で春秋時代呉国の鉄工干将により鑄造した鎡鄒島という神剣の化身だ」というものである。鎡鄒島は元々島であったが、干潮の際、島と大陸の間に道が現れる。満潮になると島となる。鎡鄒島は耕地が非常に少なく、漁業が中心産業である。島内の主な信仰として、龍王信仰が盛んである。筆者は何回か調査を重ね、当地の文化に大変興味を抱いた。

調査地において、「谷雨節とは何か」「谷雨節の儀礼は何か」「谷雨節に関して、住民意識はどういった事例があるのであろうか」といったいくつかの疑問について検討をしていきたい。

本稿は、主に二つの部分を含めている。第一部分は鎡鄒島の谷雨節の供え物の準備、時間、儀礼、祭祀人数、過程などの方面を記述する。第二部分は(1)龍王信仰から見る住民意識、(2)龍王廟の復建と住民意識、(3)政府主催の漁民節から見る住民意識、(4)谷雨節の女性活動と住民意識、(5)海洋資源乱開発への不安、という五つの角度から住民意識を論じる。

本稿は未熟な点がある。読者の方には何卒ご指導を賜りたいと考える次第である。

An observation of The Grain Rain Day and the Residents' consciousness of
Jiaodong Peninsular

— take Moye Island in Rongcheng City of Shandong Province as an example —

Abstract : In Chinese Folklore Studies, related research on residents' consciousness is quite limited, as a result, after detailed investigation on The Grain Rain Day of Moye Island in Rongcheng City of Shandong Province, with a deep understanding of sacrificial ceremonies for Loong king, I write this article which mainly focuses on the analysis of the consciousness of local people.

This paper is developed using the method of literature review and fieldwork. During the pro-

cess of many times of investigation within one year, everyday the writer works as an observer to investigate the locals' daily life and the sacrificial ceremonies. And it is the gradually founded understanding and trust in the process of investigation that helps this research go smoothly.

There's a folk proverb in Rongcheng City goes that when Grain Rain comes, the harvest time of fish also comes, which, according to the local experienced fishermen, is because every when Grain Rain comes, the current of Yellow Sea brings large schools of fish. And the Grain Rain Day is just the time for the local fishermen to hold sea sacrificial ceremonies.

Moye Island lies in the southeast of Rongcheng City, whose shape is like a sword. Among the various legends of this island, the most famous one is that Ganjiang, a character in Chinese fairy story, dropped a sword made by himself named "Moye" here, and then the sword turned into the island. The Moye Island was at first not connected with land, and at that time, only when the tide ebbed could the so-called road emerge. The farmland on the island is quite limited, so the fishery is its core industry, thus the belief of Loong King of the sea thrives. After several times of investigation, the culture of this island strongly appeals to the author.

Then, what is the Grain Rain Day like on the island? How about the process of the sacrificial ceremonies? And what are the consciousness of islanders towards the Grain Rain Day? Questions like this will be discussed in this paper.

This essay mainly has two parts. The first part generally elaborates the time, the number of people, the process of the ceremony, etc. of the Grain Rain Day. While the second part discussed the Residents' sentiments, which is subdivided into five parts as follows: 1. the belief of Loong King of the sea; 2. the rebuilding of Loong King Miao; 3. the Fishermen Festival held by local government; 4. the role of women in the Grain Rain Day; 5. the anxiety and confusion about the Over-exploitation of marine living resources.

If there is any inappropriateness, valuable comments are highly expected. This article is meant mostly as examples for more specific study, and aims to enrich the maritime folklore research.

はじめに

谷雨になると、⁽²⁾膠東地区における栄成市の漁民たちは、龍王祭祀などの祭祀活動を開催する。この祭祀活動は谷雨節、あるいは漁民節と呼ばれる。なぜ谷雨の時期を選ぶのだろうか。それを知るためには、栄成市の地理的位置を見なければならぬ。栄成市は山東省の一番東側に位置している県級市であり、北、東、南で黄海に面する中国最大漁港の一つである（図1）。現地の経験ある漁民の間では、谷雨になると黄海の海流により、近海に数多くの魚が現れるため、「谷雨、百魚上岸」⁽³⁾という諺がある。

(1) 中国祭海研究の現状と問題提起

従来の中国民俗研究において、海洋民俗に関する研究は少ない。谷雨節⁽⁴⁾、漁民節⁽⁵⁾、開洋節⁽⁶⁾、謝洋節⁽⁶⁾などの祭海⁽⁷⁾に関する研究はわずかである。中国知網⁽⁸⁾の論文データによると、1983年から2017年までの「祭海」に関する論文数は168件である。また、1955年から2017年までの「谷雨節」に関する論文は9件、「漁民節」に関する論文数は16件しか確認できない。2008年、中国非物質文化遺産に「開洋節・謝洋節」という条目が付加されてから、「祭海」研究が大いに注目され始めた。特筆すべきは

浙江岱山県で2011年、2013年に行われた「中国民間海洋信仰と祭海文化資源シンポジウム」である。『中国民間海洋信仰与祭海文化研究』（2011）と『中国民間海洋信仰研究』（2013）が出版され、2014年には『象山漁民開洋節』、『岱山漁民謝洋節』が代表的な成果として出版された。これらの研究では、浙江省開洋節謝洋節の儀式が詳しく具体的に論じられており、近年発表された論文も中国海洋民俗の研究を大きく発展させている。

膠東地区祭海研究について『海神、海神信仰和祭祀仪式——山東沿海漁民的海神信仰与祭祀仪式调查』は、山東半島沿海再開儀式を系統的に述べている〔葉濤 2002：65～81〕。2008年以後、特に「即墨田横祭海節」を中心とする研究成果が次々と現れている。例えば、「漁業上岸：民俗传承与文化再植——即墨田横祭海節的传承、变化与反思」〔李传軍、趙欣、潘娜娜 2014：114～124〕、「寻找传承与变迁中的民俗文化——即墨田横祭海节田野调查报告」〔周甬琴 2011：107～110〕、「政府主导下民间信仰文化的传承与发展——基于田横祭海仪式与宝格德圣山祭祀仪式的比较」〔宋宁而、宝娃 2013〕、「胶东祭海仪式变迁——以田横镇黄龙庄祭海节为例」〔宋宁而、范晴 2013〕、「社会变迁视角下田横祭海节功能演变研究」〔馬坤 2013〕などが発表された。

中国の祭海研究においては、媽祖信仰が大部分を占め、海龍王に関する研究は少ない。膠東地区祭海研究では、主に「即墨田横祭海節」が注視されている。また、栄成市祭海研究の唯一の論文「山东荣成院夙村龙王信仰与祭海仪式研究」〔于曉雨 2013〕を含め、これらの文献や、論文でも、ほとんどの研究は儀式全体の記録をはじめ、祭海の儀式と当地の風俗の結びつきや、祭海の影響などを論じている。しかし、地元漁民の視点から、自身の住民意識などを論じたものは極めて少ない。以上の研究成果及び課題を踏まえ、こうした民俗学的な問題に対して、本稿では漁村の祭海を明らかにし、さらに漁民たちの視点から住民意識を明らかにしたいと考える。

(2) 調査について

近年来、観光ブームと共に、多くの観光客が次々と栄成市を訪ねている。2007年6月9日、政府は長い歴史を持つ東褚島の海草屋（写真1）の保存状態が良好だという理由から、東褚島村を「中国歴史文化名村」と命名した。2008年に院夙村の谷雨節は、栄成市谷雨節の代表として、中国非物質文化遺産に登録された。東褚島村や院夙村には、現在、非常に多くの観光客や記者、学者などが訪ねている。しかし政府活動が活発でない鎧鉦島に、観光で訪れる人はとても少ない。そのため、商業開発は行われておらず、古い状態を保っているといえる。鎧鉦島は本研究において調査に適した地域だと筆者は考える。

文献調査については、市図書館と档案局及び博物館で資料の収集を行った。文献資料に基づき、調査地の歴史と行政の変遷を分析することができる。研究方法は、フィールドワークを中心として進めた。筆者は調査地に泊まり込み、日々調査地の人々の生活を観察し、生業や年中行事にも積極的に参加した。当初は、調査地での信頼を得ることが難しく、調査が進めにくかったが、度々足を運び、滞在するうちに、信頼を得ることができた。滞在期間中は常に島民と一緒に食事をしたり、インタビューを行ったりした。谷雨節のときには、龍王廟管理人と、一緒に供え物の中心であるナツメマントウとウサギマントウを作ったほか、調査地の人々と打ち解けて話もできた。今後も、調査を継続して論文を執筆していきたい。

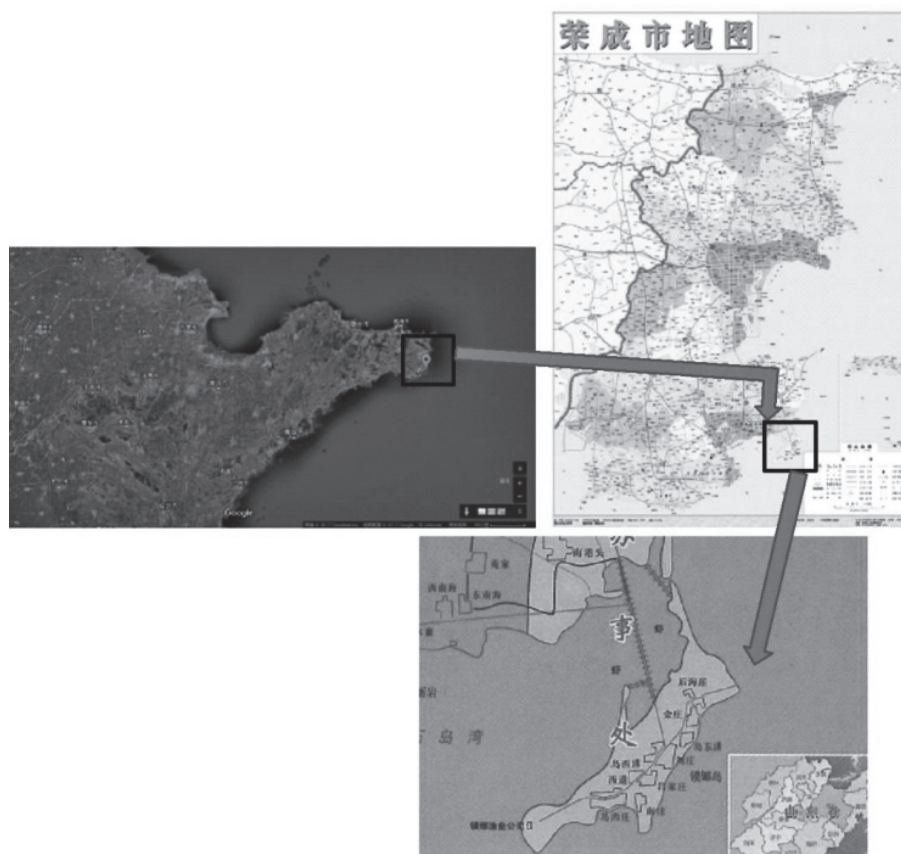


図1 鎧鉦島の地図上の位置（出典：Google 地図、榮成市地図〔山東省地図出版社 2013〕、榮成市寧津街道轄区圖〔威海市新聞出版局 2008〕より作成）

I 調査地の概況

(1) 行政区分の変遷

現在、鎧鉦島は行政上、山東省榮成市寧津所鎮に属する。1839（道光 19）年に出版された『文登県志』によると、清の時代に鎧鉦島は文登県の雲光都(9)に属しており、民国時代初期、榮成県の第 6 区(10)に包括されていた。1930 年から、榮成県は 7 区に分けられ、鎧鉦島は震海郷となり、第 7 区に属した。1945 年 9 月、石島特区が創設された後、石島特区の甲子山区に属し、1946 年 11 月には石島市鎧鉦島区に属した。1948 年、榮成県甲子山区に属し、1949 年の解放後、この地方は頻繁に行政区画が変わった。1950 年 9 月、榮成県第 12 区に属した。1954 年 4 月、石島県鎧鉦島区として独立した。1958 年の人民公社成立に際して、寧津人民公社に組み込まれた。1984 年 4 月、鎧鉦島郷が成立した。1993 年には鎧鉦島鎮となり、2000 年 6 月 23 日鎧鉦島鎮を取り消し、寧津鎮に組み込まれている。鎧鉦島は島西庄村、南洼村、西道村、島西構村、呂家庄村、劉庄村、島東構村、金庄村、後海崖村の計九つの自然村を包括している。

(2) 島の概況

鎧鉦島は元々、形が剣のような島であった。干潮のときには、島と大陸の間に道が現れ、満潮になると、島になった。面積は 8.05 平方キロメートル、そのうち、陸地面積が 4.75 平方キロメートル



写真1 海草屋の様子



写真2 ナマコ養殖池の様子

で、干潟面積が3.3平方キロメートルである。海岸線の長さは18キロメートルに至る。地形は平坦であり、川はない。鎭鄒島の特色ある民家は、海草屋（写真1）と呼ばれる。家の屋根が、主に沿海の特別な海草を材料として作られる住居である。

1971年に、島民たちは自発的に島と大陸の間の海を埋め立て、道を作り、初めて大陸と島をつないだ。安全性を確保するため、90年代に政府がこの道を改修した。その後、政府は数回にわたり、島内の道を作り直し、バスを設置している。港と埠頭が島の西部に設けられ、船の置き場として機能している。港の東部には、「姑嫂石」伝説（伝説の詳細は3章）で有名な大きな石がある。

(3) 生業

鎭鄒島は漁業で有名な島である。1931年の山東省漁業調査では、「山东位于东角之端，港島最多，沿海居民全数以渔为生活。石島之东有鎭鄒島，南为大魚島，皆为产鱼最多之港島」（すでに1931年に栄成市は、島と港が中国国内で最も多く存在する場所となり、沿海住民のほとんどが漁業で暮らしを立てていた。なお、東南部に位置している鎭鄒島と大魚島は魚介類の最も豊かな産地であった——日本語訳は筆者）と述べられている〔栄成市志 1999 3〕。1956年から、昆布の養殖が始まり、今でも養殖、掬い取り、加工が一体化している。今に至るまで、島の干潟は全て開発された。ナマコ養殖池80ヘクタール（写真2）、エビ養殖池200ヘクタールが建造されているほか、近海養殖では貝類養殖250ヘクタール、藻類養殖300ヘクタール、ほかの魚介類養殖100ヘクタールがある。島の南沿岸はナマコの養殖池であり、北沿岸はエビ養殖池である。

(4) 鎭鄒島における廟の体系

・龍王廟

龍王廟は龍王祭祀の場所であり、新年の龍王祭祀及び龍王誕生日祭、谷雨節が行われる場所である。鎭鄒島の九つの村の中で、島西構村と西道村には龍王廟が建立されておらず、そのほかの七つの自然村には、龍王像が置いてある龍王廟がある。龍王祭祀のとき、島西構村と西道村の漁民は、島東構村あるいは島西庄村（大庄村とも呼ばれる）の龍王廟で祭祀を行う。龍王は鎭鄒島の漁民たちにとって最も重要な神様である。



写真 3-4 土地廟と照壁

• 土地廟

九つの自然村には、全て土地廟が修築されている。新年と年中行事を行う際には、土地神も祀る。⁽¹¹⁾しかし、土地神は一番地位の低い神であるため、紙銭を2、3枚しか焚かず、細い線香で祀るにすぎない。一般的には、龍王廟が豪華に建てられる。それに対し、土地廟は中庭がなく、ただ廟の主殿と照壁（写真 3-4）しかない簡易建造物である。

人が死ぬとき、霊魂はまず土地廟に行き、土地神に報告してから冥途に行く。鎭鄒島では、土地神は霊魂の登録を管掌する神である。

II 鎭鄒島谷雨節（島東構村）

島東構村は鎭鄒島の東南部に位置している漁村である。島東構村は在籍人口が560人。計260戸であるが、島東構村から転居せずに島外に住居を定める人が多くいる。農耕地が非常に少なく、ほかの島民と同じように遠洋漁業、近海漁業、近海養殖などで生計を立てている。

• 場所（東構村の龍王廟）

島東構村における龍王廟の旧廟の年代は、分かっていない。文化大革命のとき、封建迷信であると

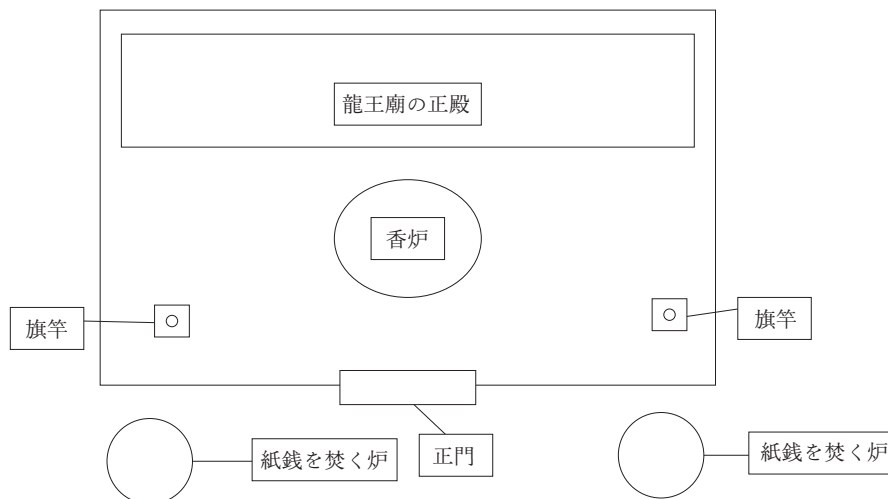


図2 龍王廟平面図

されたため、龍王を祭祀することが禁止され、旧廟は破壊された。漁民のZさんは、龍王像を取り出し、家の貯蔵用の穴倉に龍王像を置き、ひそかに龍王を祭祀していた。ほかの漁民は自分の家でこっそり龍王に紙銭を焚いたという。

現在の龍王廟は1994年に、安全を考慮して旧廟の旧址ではなく、新しい所に建立されたものである。当時の鎭鄒島で最も立派な龍王廟であった。新年、谷雨節、龍王誕生日には、島東構村以外の鎭鄒島に住んでいる漁民たちも、この龍王廟へ祭祀に来る。島東構村の龍王廟正殿に置いてある龍王像は泥塑像である。正殿の屋根は赤く、柱は金龍の模様で飾られ、外壁にエビの兵とカニの將軍の絵が描かれ、中庭に旗柱と大きい香炉が置いてある（図2）。

(1) 供え物の準備と掃除

谷雨節の供え物は豚頭（1個）、豚足（2個）、豚レバー（2個）、魚（1匹）、果物とお菓子盛り皿（2皿）、ナツメマントウ（10個）、ウサギマントウ（1個）などである。用意する人は、龍王廟の建立時から数えて三代目にあたる管理人Dさん夫婦である。谷雨節の供え物は朝6時までに、龍王廟に並べなければならない。かつ新鮮であることが求められるため、谷雨節の前日には、供え物の準備が完了しなければならない。



写真5 ナツメマントウ



写真6 ウサギマントウ

・ナツメマントウ（写真5）

供え物を用意するときに、最も時間がかかるのは10個のナツメマントウ（方言でザオボーボ）の準備である。鎭鄒島において、ナツメマントウは伝統的な主食であり、新年など重要な年中行事のときには、大きいナツメマントウを作る。また、平日でもほぼ毎日、食べるものである。酵母の入った小麦粉で作った生地を発酵させた後、捏ねたり糺をさしたりしてから、蒸して作る。形は半球形である。ナツメマントウのほか、龍などの干支やスズメなどの動物形のマントウも、日常的に作られている。しかし、谷雨節のお供え用のナツメマントウは形、大きさ、重量、数において平日のものに比べ基準が厳しい。「龍王に仕えるのは、いい加減にやってはいけません。龍王は何でも見通しますよ。ナツメマントウといえば、谷雨のとき、必ず10kgの小麦粉で作ります。新年なら7.5kg、誕生日（旧暦の6月13日）なら6kgの小麦粉でマントウを作るのは大丈夫です」と、管理人の奥さん（Zさん、70才）が話していた。10kgならば、1個のナツメマントウが直径25cm程度で重さ1kgぐらいの大マントウであることが分かる。それほど大きいマントウを作るのはなぜだろうか。管理人の奥

さんは「マントウが大きければ大きいほど、龍王の霊力が見える」と説明する。そして、生マントウの上を刀で3回切る。そうすると、蒸されるときにマントウの切られた部分が、マントウの膨大とともに裂ける。現地で「マントウが笑う」という。「マントウが笑う」状態が一番きれいな状態と見なされる。

- ウサギマントウ（写真6）

ウサギマントウは谷雨節だけに用いる供え物である。赤小豆を目の材料とし、ウサギの形をしている。「谷雨節になると、魚が多くなる。ウサギは走るのが速いので、魚を追いかけて、力を出して、漁民に協力する」という噂があるため、ウサギマントウを作るという。

- ほかの供え物

新鮮さが必要なため、谷雨節の前日に市場で、豚頭（1個）、豚足（2個）、豚レバー（2個）、魚（1匹）、いくつかの果物とお菓子を買う。当地の伝統により、これらの供え物は龍王の好みだとされている。豚頭、豚足、豚レバー、魚、四角く切った豚肉もしくは豆腐、果物とお菓子を別々にお皿に置いた後、供え物の上に飾り物（ほうれん草など緑の野菜と赤棗）を置くと、供え物の準備が完了となる。

- 掃除

龍王廟の掃除は、前日に供え物の準備が済んだ後、行われる。時間の禁忌はなく、何時に行ってもいいという。

(2) 谷雨節当日の儀礼

- 供え物の並び

朝6時に管理人の奥さんが、供え物を並べ始める。

図3のように並び、9品を供える（新年と誕生日には7品を供え、品数は必ず奇数だという）。内側の左から順番に、豚レバー、豚足、豚頭、魚、外側の左から順番にナツメマントウ5個、果物とお菓子1皿、ウサギマントウ1個、果物とお菓子1皿、ナツメマントウ5個である。また、ナツメマントウの並び方は、3段になっている。第1段に3個あり、第2段、第3段に各1個ずつ置いてある。マントウを逆さまに置いてはいけない。供えたものは家に持ち帰って、みんなで食べる。

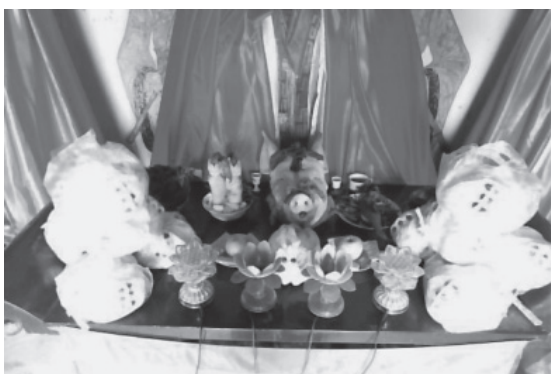


写真7 供え物の並び

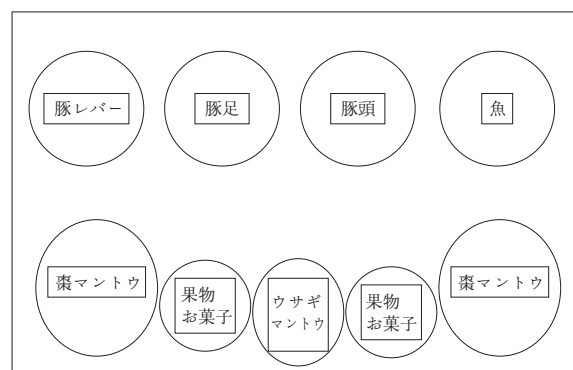


図3 供え物の並び見取り図

- 龍王廟で旗を掲げる

供え物を並べた後、管理人Dさんは龍王廟で旗を掲げる。左の旗には「風調雨順」、右には「海不

揚波」と書いてある。その意味は「海の風が止んで、波が穏やかになる」である。

・祭祀過程

朝6時半に、龍王廟の管理人Dさんが廟の門を開ける。すると、漁業に仕える村民と島東構村内でアルバイトしているよそ者が次々に龍王廟に行き、龍王を祀る。12時半までに50戸の家庭が龍王祭祀に参加した。男性が118人、女性は39人であった。14戸の家庭が龍袍、ナツメマントウとウサギマントウをもって、祭祀を行う。ほかの家庭も、ナツメマントウとウサギマントウを作ってはいるが、家に置いて祭祀を行う。

祭祀をする流れとしては、まず紙銭を焚くことから始まる。漁民は廟外に置いてある炉で紙銭を焚いた後、廟の中庭に入り、龍王に線香をあげる。この地の線香は特製で、長くて粗く、表に縁起のよい言葉が書かれてある。線香の煙と灰が、多ければ多いほどよいという。それから、正殿で龍王にナツメマントウ、ウサギマントウと龍袍を献上し、龍王に龍袍を羽織る(写真8)。その後、願い事をしながら龍王に叩頭する。大きい声で報告するように、自分の願い事を叫ぶ漁民は数多くいる。「大きい声なら、龍王が願い事を十分に聞いてくれて、たぶん叶う確率が高くなるでしょう。これは当地の伝統的なやり方だ」と管理人の奥さんが説明してくれた。漁民たちの願い事は主に二つある。すなわち「平安」と「豊漁」である。漁民は廟外の空き地で爆竹を鳴らし、花火を放つ。最後に、献上したマントウを片付けて、持ち帰る。



写真8 龍王に龍袍を羽織る

・食事

漁民家族の集まり

島外に引っ越した元島民はほとんど若者であり、結婚や、就職などの理由で島外に定住する。一部は海洋と関係のない仕事に就いているが、一部は漁業に従事している。漁業関係の仕事で働いている元島民たちは谷雨節に島へ帰り、出身の村の龍王を祀る。儀式が終わった後、この元島民たちは自分の家族と一緒に昼食をとる。

船長と船員の会食

島民でない船長は、龍王を祀った後、船員らを集め、食事に招く。この日、船長と船員は一緒に食事したり、お酒を飲んだりして、前年の疲労を一掃する。谷雨節は島民にとって、龍王を祀るだけではなく、家族の集まる日でもある。船長と船員にとって、谷雨節の会食は、以下三つの意義があると筆者は考える。

- (1) 船長と船員が交流することにより、お互いの感情を繋ぎ、より信頼関係が深まる。そのため、相互の了解度がさらに高くなることができる。
- (2) 食事は船員の1年間の労働に対する、返礼と感謝と見なされる。
- (3) 船員の士気を高め、今年も真剣に働き、漁獲量をさらに増やそうという決意が生まれる。「お金を儲ける」「金持ちになる」という目的性を強くもつスローガンもある。

Ⅲ 住民意識

(1) 龍王信仰から見る住民意識

まず、鎧鎧島の「姑嫂石伝説」を分析してみる。

嫂と二人の妹が潮干狩りに行ったとき、突然、龍王太子と会った。太子は妹たちを太子妃として娶りたがった。「もし妹たちが太子妃になったら、家族はどんなに悲しくなるだろう」と嫂は思った。そして、嫂はしっかりと妹たちの手をつかみ、太子のエビ家来と戦った。太子は、かっとなり三人を石に変えた。



この伝説を分析すると、まず、「嫂と二人の妹」 写真9 姑嫂石

は「海に出る漁民」と見なすことができる。龍王は海上の天気と風波を掌握する神であるから「龍王太子とエビ家来」は「海上の風波」の隠喩だといえる。妹たちが太子妃になる（死ぬ）と、家族は悲しくなるので、無事に帰るためには戦うしかなかったのである（自救）。最後に命がない石になるという悲劇的結末になったが、永久に戦う姿が残った。すなわち、次のようにまとめることができる。

嫂と二人の妹 潮干狩り 龍王太子 戦う 石になる
(海出る漁民 漁撈に行く 海上の風波 自救 死ぬ)

「姑嫂石」は海岸に近い所にあり、干潮になると徒歩で石まで行ける。漁民たちは毎日、海に出るときに「姑嫂石」を見ては、「姑嫂石伝説」のことを思い出す。「姑嫂石伝説」に描かれる風波は、龍王太子のように残酷なものだ。「姑嫂石」を見るとき、漁民たちは海の恐怖も思い出すのだろう。科学技術が発達しておらず、天気予報もなかった時代でも、天気予報の確率が上がった現在でも、家族の経済的な柱である漁民たちは沖へ漁に出てしまったら、風波を避け難い。以前、海に出る際には、自分の経験に基づいて天気を判断するしかなかった。予報の確率が低く、それに加え、船が小さいため、風波にあうと死んでしまう可能性が極めて高かった。現在では天気予報が発達しているため、大きな波の日は海に出ないが、危ないときは、今も時々ある。

海に出る危険性がありながら、生計のために漁に出る漁民たちは、自分の命を龍王などの神に任せる。生きるか死ぬかの瀬戸際、ただ神の加護を祈るしかない。伝統的には、女性は龍王廟で紙銭を燃やしたり、焼香、叩頭したりして、海に出る家人が無事に帰るのを祈った。両親、息子、妻のために、無事に帰ることは大切である。龍王は漁民の守護神となる。谷雨節の供え物の準備から、当日の祭祀に至って、参加する漁民たちが、全員心から龍王を祭祀しながらお祈りする心情はよく分かる。島には「うちのお爺さんは若いとき、ある日海に出たらひどい嵐にあった。しまったと思った瞬間、ふらふらする船が転覆した。しかし、彼は沈むどころか、足の下に橋のようなものが現れた。目を凝

らしてじっと見つめると、なんとそれに巨大な海亀だった。その後、彼は海亀の殻を踏み、救われた」という世間話がある。現地では海亀、鯨、イルカは龍王の部下と見なされている。危ないときには海亀、鯨、イルカが救いに来る。また、鯨とイルカの出没する所、常に魚群があると漁民たちは認識している。漁民が海亀、鯨、イルカを捕り、売買することは禁止されている。

科学技術の発展とともに、船の安全性が高まり、漁民たちの豊漁の希望は強くなった。「龍王は海の魚介類を管理している。捕る魚の多少は龍王の気持ち次第だ」と漁民のWさんはいう。捕った魚介類を売れば、お金が手に入る。漁民にとって、豊漁＝お金だといえる。すなわち、龍王は漁民の「財神」でもある。現在、龍王を直接に「財神」と呼ぶ漁民は少なくない。

一方、漁民は龍王を畏敬もしている。

島東構村のLさんは龍王に何回も「お金持ちになりたい」ということを願ったが、1年間経っても叶うことはなかった。龍王を心から憎んだという。そして、ある日の深夜、龍王像の首を切って、崖から像の首を海に投げ捨てた。翌日の朝、お参りに来た村民たちは首なし龍王像を見ると大変驚いた。しかし、漁民が首をどんなに捜しても、見つからなかった。占い師は「その人の運は終わりだ。不運になる。自分で龍王に過ちを悔い改めたら許してもらえるかもしれない」といった。その後、確かに占い師のいった通り、Lさんは急に変な病気にかかり、どうしても治すことができなかった。Lさんはナツメマントウをもち、龍王廟で龍王像の首切りを謝り、ちゃんと反省した。それから、Lさんの病気は不思議と治った。

漁民にとって、不敬などの過ちがあるとき、龍王の処罰を受けるかもしれない。漁民の「平安」「豊漁」という願い事を叶えてくれたことに対する恩返しも必要である。そのため、嵐から救われた漁民は必ず、ナツメマントウと豚／豚頭をもち、龍王廟でしっかりと祭祀をして恩返しをする。そのようにしなければ、龍王の処罰を得る可能性が高くなる。

現在、谷雨節に子供を連れて龍王祭祀に行く家族は4戸ある。両親は龍王祭祀の礼儀を子供に教えた後、子供たちは両親をまね、龍王に線香をあげて、三叩頭する。これは龍王信仰、龍王祭祀を後代に伝承、受け継ぐ事を示唆している。

一方、調査により、島民たちは「島内」、「島外」をはっきり区別していることが分かる。島外のことを聞く質問に対する返答に、「島内」、「島外」という言葉が出現する頻度は90%に至る。一番多いモデル的な返答は「島外には……。しかし、われわれ鎭鄒島は……」である。例えば、媽祖のことを質問すると、「島外では多分媽祖を信仰するが、われわれ鎭鄒島では媽祖を信じない」と回答された。島民は島のことについては、ほとんどのことを理解し、知っている。しかし、島外の龍王廟に対しては、自分の村に龍王廟がなくても、どんなに有名な龍王廟であっても島民たちは祀らない。媽祖は中国海沿岸、特に福建省、浙江省漁村の重要な海神であり、漁民の安全を守る神様である。しかし、鎭鄒島には媽祖廟がなく、島民は媽祖を祀らない。車で10分ほどの距離にある石島天后宮は、非常に有名であるが、島民たちは、その宮については、ほぼ知らない。鎭鄒島に近い石島鎮ほか、東褚島村、院汭村にも媽祖廟が建立されている。なぜ、鎭鄒島には媽祖信仰がないのだろうか。一つの理由として、清の時代に鎭鄒島が文登県の雲光都に属していたことが考えられる。文登県では長く龍王を信仰し、龍王に関する伝説もある。「祭敕封溥惠佑民龙神文」という祭祀文には「于维龙神，昭垂灵迹，号崇雨师，功参风伯。旱暵偶逢，立施甘泽。德溥閭阎，惠均阡陌。谷赖以生，穰穰驿驿，兼

佑商民，險平海舶。浪静波恬，帆檣快适」と記載されている。このことから、龍王は風を起こし、雨を降らせる力があり、漁民を守るために風波を静める神様であることが分かる。文登県の龍王信仰の影響を受けたことから、龍王を海神として祀った可能性がある。もう一つの理由として、鎭鄒島が島であることから、外部との繋がりが緊密ではなく、情報にひどく疎かったという事情がある。長い時間を経て、島民たちは閉鎖的、保守的な情緒を生み出した。現在、島外の大陸と繋がる道を築いても、島民にとって鎭鄒島は依然として独立する世界だと筆者は考えている。この二つの原因があるからこそ、「島内」、「島外」をはっきり区別している住民意識が生み出され、現在でも鎭鄒島に媽祖信仰が伝播されないのではないかと考えられる。

(2) 龍王廟の再建と住民意識

龍王廟は村民から寄付金を募り、建てられたものであった。龍王廟が文革で倒壊され、再び建立されるまで、漁民の龍王信仰の置き場はずっとなかった。龍王廟の再建は漁民にとって、大変喜ばしいことであった。龍王廟が再建されたときの世間話がある。

「新龍王廟は旧廟（旧廟の遺跡はもう少しも残っていない）の隣に建てられた。竣工式のとき、一筋の赤光が旧廟から飛び出した後、新廟の上で3回、旋回し新廟に入った。みんなはその赤光が龍王だといいながら、三叩頭した」というものである。

龍王廟が建立されるにつれて、漁民たちの緊張が緩まってくる。漁民たちは赤光を見ると叩頭し、祈りを捧げる。それは、龍王祭祀に対して切羽詰まった気持ちを表している。この世間話の現れにより、新龍王廟は神秘的な色合いに満ちてくる。そして、漁民はこの新龍王廟を信じ、龍王をさらに敬虔に祀る。

(3) 政府主催の漁民節から見る住民意識

政府によって開催された漁民節を考察しよう。

文化大革命の時代、祭祀活動は一切禁止された。改革開放後、中国沿岸漁業の発展につれて、中国の他地域はもちろん、日本、韓国などの国との貿易も徐々に増えてきた。栄成市は漁業の発展と文化交流のために、漁民節を開催し始めた。第一回漁民節は、漁民節らしい漁民節だと思われる。なぜな

表1

	1991年	1992年	1993年	1994年	1997年	2010年以後
	第一回漁民節	第二回漁民節	第三回漁民節	第四回漁民節	第五回漁民節	開洋節謝洋節
場 所	大魚島	栄成市体育場	栄成市体育場	栄成市体育場	栄成市体育場	院尙村
期 日	4月20日	4月20日	7月25日	7月25日	7月25日	谷雨前日と当日
プログラム	漁民のレクリエーション活動、漁業会社の表彰式	鼓演奏（漁民）、花車（漁民）、近海養殖の見学式	俳優出演、花車（漁民）、	漁業主題のダンス（俳優）、花車（漁民）	団体ダンス、鼓演奏、歌曲を歌う	龍王祭祀、漁民のレクリエーション活動
中心人物	漁民、漁業会社	漁民	俳優、漁民	俳優、漁民	中国俳優、韓国俳優、中国声楽家	漁民
祭祀儀式	あり	なし	なし	なし	なし	あり
供 え 物	あり	なし	なし	なし	なし	あり

ら、1991年、第一回漁民節の開催期日が谷雨当日の4月20日であり、場所が大魚島であったからである。大魚島の女性たちは伝統に従い、ナツメマントウなどの供え物を用意して、きれいに並べていた。漁民はレクリエーション活動を通じ、自分たちの祝日を祝った。そして、第一回漁民節では、政府は優秀な漁民会社を表彰した後、漁業から帰る漁民を迎えに行き、漁業を強力に支持することも表した。第二



写真10 第1回漁民節では50kgのナツメマントウとほかの供え物
(武盛斌 栄成市档案局蔵)

回漁民節になると、開催期日は変わらずに谷雨当日の4月20日であったが、場所は市体育館に変更された。場所が漁村ではなかったため、龍王祭祀は取り止めになってしまった。1993年からは、観光客が海水浴場で遊べるように、日時が7月25日に変更された。また、観光客のために有名な俳優出演が、漁民出演に取って代わった。1997年まで、漁民出演は全てキャンセルされた。政府による漁民節は、当初は確かに漁民を中心とする本当の漁民節であったが、その後、観光客などの影響で、漁民には関係のない大型夜会になった。

2008年、院弁村の谷雨節は第二回中国非物質文化遺産に、登録された。2009年、新たな龍王廟が竣工した後、2010年から院弁村の谷雨節は政府の支援により、「開洋節謝洋節」と称し開催されている。政府の支援があるため、資金が十分であり、供え物としてのナツメマントウも50kgの小麦粉で作られている。当祭祀は、非常に大型の龍王祭祀活動である。

では、漁民たちはこの漁民節に対し、どう考えているのだろうか。老漁民のWさん(81才)は「第一回漁民節のときは、大魚島で行われ、私は見に行っただけ。本当に漁民の祝日だという感じで、本当にびっくりした。気持ちからいえば、羨ましいとか感動とか、もし自分の村にもこのような活動があったらいいなと思った。あと、漁民節は栄成市体育場に引っ越した後、私たちにとって、遠すぎ、それにチケットも必要だから、漁民節に二度と参加しなかった。参加した人から「立派な夜会だけど、漁民とは関係ない」という評価が返ってきた。でも今院弁村はあらためて漁民節を開催し、すごく立派な龍王祭祀だよ。いつかここ(鎮鄒島)で開催したら満足だ」と語ってくれた。院弁村の龍王廟に祭祀に行くのかどうかを尋ねると、Wさんは「行かないよ。我々の村(島東構村)には龍王廟がある。龍王は必ず守ってくれるとちゃんと分かる。院弁村の人ではない私を、龍王が守るかどうかわからない」と答えてくれた。

政府により開催された漁民節について、一つ重要なポイントがある。筆者の調査によると、鎮鄒島に現存している龍王廟は、ほぼ90年代初期に修築されたものである。これはなぜだろうか。文化大革命の時期には、祭祀活動は一切禁止された。出る杭は打たれ、文革が終わっても、漁民たちは自発的に公然と龍王祭祀を行う勇気がなかった。政府が第一回国際漁民節を開催したということは、まるで政府から民間に「龍王祭祀ができるよ」という信号を送るようであった。そのため、漁民たちは伝統に従い、谷雨節を祝い過ぎ始めた。そして、龍王祭祀の場所である龍王廟も次々に建立された。

当初、政府の漁民節に対し、漁民たちは歓迎の態度であった。しかし、漁民節が大型夜会になるとともに、漁民との関係が薄くなっていき、漁民節は、漁民たちを忘れていったかのような行事になっていった。本来の、漁民たちが見たい、参加したいという漁民節は谷雨節当日に行われ、漁民を中心とし、龍王祭祀をしなければならない祭祀活動である。それゆえ、現在、院弁谷雨節は名称を「開洋節謝洋節」に変更したとしても、鎩鄒島の漁民たちは、羨ましく感じているのであろう。

一方、漁民たちは政府に鎩鄒島で大型の漁民節を開催してほしいと希望している。鎩鄒島は海草屋、砂浜などのよい生態環境をもち、龍王祭祀の雰囲気をもっているという意識と、島に対する高い誇りをもっていることが分かる。また、政府活動により鎩鄒島に対する注目度が高められ、新たなビジネスチャンスが来るかもしれないとも感じている。そうすれば、島民の生活レベルをもっと向上させることができる。2007年に威海市が公布した『「十一五」海洋経済発展計画』に従い、威海市政府によって中国石油会社と鎩鄒島が協力して、大きなプロジェクトを進める計画があった。この計画では550億～600億円の資金が投入される代わりに、鎩鄒島に住んでいる人が全員、島外に引っ越さなければならないという条件がついていた。島外に引っ越せば、政府から多額の補償金がもらえたのである。ある島民はこの情報を聞いて、自分の戸籍を島に戻した。最終的に原因は不明であるが、このプロジェクトはキャンセルされた。多くの島民は非常に失望した。他方では、ビジネスチャンスのため海水養殖池の回収など政府の介入が、自分たちの今までの海水養殖や漁撈に悪い影響をもたらすのではないかと心配する漁民も多くいる。この両方面から見れば、島民の利益を脅かさない前提のもと、島民にとって、政府介入を大歓迎するという漁民の功利的な思いが分かる。

(4) 谷雨節の女性活動と住民意識

まず、二つの事例を紹介しよう。

(Wさんの例)「私は毎日朝4時に主人とサンバ(三板船)に乗って、近海で魚を捕るほか、海藻や、あるときは、クラゲもとっている。船にエンジンが付いているから、10時ぐらいに帰れる。私は漁業に参加するから、龍王祭祀をしなければならない。男たちはマントウをきれいに作ることはできない。だから、谷雨節や、新年、龍王誕生日になると、私は必ずナツメマントウを作る。ほかのマントウに負けないように」

(Zさんの例)「うちの息子は漁業ではない仕事をしていて、主人は体の原因で漁業をやめた。以前、谷雨節のとき、私もナツメマントウを作ったが、今はやっていない。最初、ナツメマントウが面倒なことだと思ったが、今みんなのマントウを作る様子を見たら、自分も作りたい」。

伝統的には、男性は漁業を、女性は家のことをしており、各自責任をもち分担した。普通、男性たちはナツメマントウとほかの供え物を作ることはできない。古代には、供え物を作ることはつらいことであったかもしれない。しかし、現在ではこの状態は変化している。現在、女性たちにとって、マントウ作りは女性特有の技術となっている。また、谷雨当日、マントウを献上するとき、ほかの女性が献上するマントウを見ながら、ひそかに自分のマントウと比較している。龍王祭祀のナツメマントウを作る女性たちは、ほかの人のマントウに負けないように、心を込めて真剣に作る。

近年、夫と一緒に漁業をする女性たちが、徐々に増えてきている。漁業に参加することから、彼女

たちは漁業家族の一員であるだけでなく、漁業労働者、参与者になる。そして、龍王祭祀に対する気持ちは、この変化につれて変わってきている。女性は、龍王祭祀の中で、自分が非常に重要な存在であると思っている。漁業に参加することは、自分の漁業才能や、今までとは違う自分を発見する過程であるといえる。一方で、漁業に従事していない家族は龍王祭祀をしないため、その家族の女性たちはマントウ集団から離れていった。マントウを作る経験を共有し、交流する機会が減っているのが現状である。それによって、祭祀をしない女性たちは、恐らく落胆しているであろう。

(5) 海洋資源乱開発への不安

老漁民 Wさんは次のように話してくれた。

「50年前の海には豊かな魚類資源があり、鎭鄒島に近い海域では常にイルカ、クジラが見えた。イルカとクジラが魚群を連れてくると豊漁になったが、近年イルカとクジラはもう見えなくなってしまった。1960年の大飢饉の時期に、沿岸の漁民たちは、豊富な沿岸の海食材のおかげで、飢饉に打ち勝った。また、90年代には、体長20センチほどのキグチが多くいたが、現在は10センチのキグチでも珍しい。1日中、何も取れない漁民がますます多くなっている」と。

海洋資源を守るために、政府は1955年から「禁漁期」を設け始めた。2017年から、「禁漁期」の時間は5月1日午前12時から、8月20日午前12時までである。それでは、漁民は「禁漁期」に対してどう考えているのだろうか。

漁民の一部は「禁漁期」を設けなければならないと考えている。しかし、彼らの関心は、むしろ海洋汚染の問題にあるようだ。鎭鄒島の重要な文化遺産としての海草屋の屋根は特別な海草で作られている。しかし、その海草はナマコ養殖池が建設されたときに、海底から全て根こそぎ取り除かれてしまった。また、昆布、キリンサイを養殖するとき、養殖糸から、それらが海底に落ちるのは避けがたいことである。その落ちた昆布とキリンサイは徐々に腐敗し、海草の生存する環境を破壊する。海水養殖の発展につれて、この海草は、絶滅の危機に瀕しているのである。現在、海草屋の屋根を修復するとき、麦わらを利用して屋根の海草に混ぜざるを得ない状況である。

一方、「禁漁期」に不安を抱いている漁民もいる。彼らは「禁漁期」になると、漁業ができないため、失業者となってしまうのである。一家の大黒柱である彼らは、「禁漁期」の生活に対して、大きな心配、不安の気持ちをもっている。

おわりに

本論では、山東省栄成市鎭鄒島地区を中心として事例研究を進め、当地の谷雨節に対する考察を通じ、現地の住民意識を捉えた。

鎭鄒島地区において行われる谷雨節の供え物の準備、当日の儀礼、当日の会食などを調査し、谷雨節の過程を明らかにした。谷雨に祭海を行うことは、栄成市沿岸特有のものである。農村に谷雨節はない。また、伝承によって作るナツメマントウや、ウサギマントウは沿岸漁村に独特のものである。谷雨節は、栄成市の漁村生活を象徴する存在となり、栄成市のアイデンティティ標識であることが分かる。

鎭鄒島の龍王信仰がいつから始まったのかについて、今は、誰も分からない。龍王は漁民の守護神と財神として見なされることから、いつの時代でも漁民たちに祀られていたのではないかと推測される。漁民たちが谷雨節などの祝日に供え物を用意したり、叩頭したりして龍王を祀るのは、「平安」「豊漁」という願い事を叶えてもらいたいからである。漁民は、不敬などの過ちがあるとき、龍王の処罰を得るかもしれない。そのため、龍王の処罰を受けたくない漁民はどのように忙しくても、龍王を祀るのである。この意識が根づいている漁民は、子供が生まれた後、子供に龍王に関する伝説や信仰を言い伝える。

龍王廟管理人 D さん夫婦の事例を見ると、現地の女性たちも龍王祭祀に参加する重要な存在であることが分かる。龍王祭祀の供え物を準備するのは、全て現地の女性たちである。また、現地では、女性が船に乗り、漁業をすることが許されていることから、一部の女性は単に家事ができるだけではなく、漁業もできる龍王祭祀の参与者となっている。鎭鄒島で重要な労働力である女性たちは、当地の漁業発展を促す存在であると思われる。

現地の住民意識を見ると、島民は鎭鄒島に愛着を持っており、女性の漁業労働参加を支持している。

もう一つの問題、すなわち海洋汚染の問題は日に日に厳しくなっている。昆布、ナマコの養殖や、干潮に無制限で海産物を取るなどにより、島の経済が発展してきた。しかし、多くの悪い影響ももたらしている。漁民は海に頼って生活しているので、海の状態を熟知している。漁民たちは不安な気持ちを持ち、未来の海に対する心配があっても、現状を変えることができない。そのため、たぶん彼らは、無力感に陥っていることだろう。海洋資源の減少、海洋汚染などの問題と海洋民俗の関係が課題として注目されている現在、これらの問題を重視すべきではないだろうか。

註

- (1) 谷雨は中国二十四節気の一つ、毎年新暦 4 月 20 日前後である。日本では穀雨という。
- (2) 膠東半島は、北は渤海と黄海を隔てて旅大半島に向かい合う半島である。主に山東半島の先端部に位置する煙台市、威海市及び青島市を指す。
- (3) 谷雨になると、黄海の海流で近海には数多くの魚が現れるという意味である。
- (4) 谷雨節は膠東半島における民間によって行われる祭海イベントである。
- (5) 漁民節は政府によって開催された祭海イベントである。
- (6) 中国岱山などの地区の祭海イベントである。2008 年に中国非物質文化遺産に「開洋節謝洋節」という条目が付加されてから、谷雨節、漁民節は開洋節謝洋節と改名した。
- (7) 海龍王、媽祖などの海神を祀ることである。
- (8) 中国の論文サーチエンジンの一つである。中国で発表された論文が全て検索できる。
- (9) 雲光都は現在の斥山鎮、王連鎮、石島鎮、東山鎮、寧津鎮を包括していた。
- (10) 6 区 民国初期、政府は榮成県を 6 区に分けた。第 1 区は喜雨郷、第 2 区は不夜郷、第 3 区は集賢郷、第 4 区は青安郷、第 5 区は中和郷という。第 6 区は名前が不明であり、その範囲は現在の斥山鎮、王連鎮、石島鎮、東山鎮、寧津鎮を包括していた。
- (11) 紙で銭形を作ったもの。祭事に神に奉ったり、死者の棺に入れたりする。中国では黄色い紙を四角く切って、供え物として焚かれるのも普通である。
- (12) 龍王廟の管理人は村政府の仕事の一つである。管理人は、村政府に供え物を用意するときに必要なお金と給料をもらう。
- (13) 龍袍は漁民自分が赤布で作る戦袍のようなものである。

参考文献（アルファベット順）

- 李天鷲、岳賡廷 清道光 20 年（1840）『栄成県志』（栄成市档案局の蔵書）
- 馬坤 2013 『社会变迁视角下田横祭海节功能演变研究』 中国海洋大学修士論文
- 歐文謹 1839 『文登県志』卷一 疆域（栄成市档案局の蔵書）
- 山東省栄成市地方史志編纂委員会 1999 『栄成市志』 齊魯書社
- 上海海事大学、中国太平洋学会、岱山県人民政府 2011 『中国民间海洋信仰与祭海文化研究』 海洋出版社
- 宋宁而、宝娃 2013 『政府主导下民间信仰文化的传承与发展—基于田横祭海仪式与宝格德圣山祭祀仪式的比较』 広東海洋大学学报
- 于晓雨 2013 『山东荣成院奝村龙王信仰与祭海仪式研究』 山東大学論文
- 周甬琴 2011 『寻找传承与变迁中的民俗文化——即墨田横祭海节田野调查报告』 電影評介
- 著者不明 光緒 『文登県志』卷四上 祀廟（栄成市档案局の蔵書）